Peace Seeds
ヒロシマの10代がまく種

被爆の記憶 色濃く宿す

第31号　平和を祈る三滝山

広島市の中心部を囲むように連なる山々は、原爆が落とされた時、多くの人たちが逃げて来ました。爆心地から北西に2・5～3・5キロほど離れた三滝山もその一つ。ふもとにあった山手川（現太田川放水路）には、途中で力尽きた人たちの遺体が浮かんでいました。また、強烈な爆風の影響を受けて屋根が飛んだり、自然発火したりしました。

この三滝山には、被爆建物や慰霊碑が多くある三滝寺、戦後、平和記念公園になった中島地区から移転してきた誓願寺、原爆で一家全滅するなどして行き場のなくなった原爆無縁墓地、核兵器廃絶を願って米ニューヨークに渡った親鸞聖人像の台座などがあり、平和を祈る山としても知られています。頂上からは市街地が一望できる三滝山。皆さんも、平和な世界の実現に向けて思いをはせながら歩いてみませんか。

△ピース・シーズ▽
平和や命の大切さをいろんな視点から捉え、広げていく「種」が「ピース・シーズ」です。世界中に笑顔の花をたくさん咲かせるため、中学1年から高校3年までの39人が、自らテーマを考え、取材し、執筆しています。

三滝寺　建物や石碑に刻まれた惨禍

三滝寺には、広島市に登録された五つの被爆建物と多くの慰霊碑があります。本堂は屋根が飛ばされるなど爆風の影響を受けて再建されましたが、鎮守堂や想親観音堂などは残っています。中でも三鬼権現堂は今もゆがんだまま。中で座ると実感できるそうです。

戦後すぐに建てられた「本坊」には、原爆で一部が焦げた竹が使われています。三滝山での被害を伝えようと、当時の住職が使いました。

あの日、三滝山の木々は原爆で自然発火。黒い雨が降って鎮火したそうです。三滝山のシンボルである滝の水は黒くなりました。2日後ごろから避難する人が集まり、被爆15年後ごろまでいた人もいました。

寺にある慰霊碑の数は分かりません。住職の佐藤元宣さん(59)は「ここは山の中で涼しく水が豊富。夏の暑い中、水を求めて亡くなった人を供養するのに好まれているのではないか」と話します。滝の水は、原爆の日に平和記念公園(中区)の慰霊碑に供えられる献水に使われています。

入り口近くの多宝塔（県重要文化財）は1951年、関西に住む広島出身の人たちにより、原爆犠牲者の供養のために和歌山県内の神社にあったものを移しました。原爆投下から三十三回忌を機に、俳句と短歌を刻んだそれぞれの句碑、歌碑、ホロコースト（ユダヤ人大虐殺）によるアウシュビッツ犠牲者の碑もあります。（高3岡田春海、中2川岸言織）

㊨原爆で一部が焦げた竹がそのまま使われている三滝寺の本坊（撮影・中原維新）

㊧原爆投下から三十三回忌に33人が詠んだ短歌を載せた原爆供養合同歌碑（同）

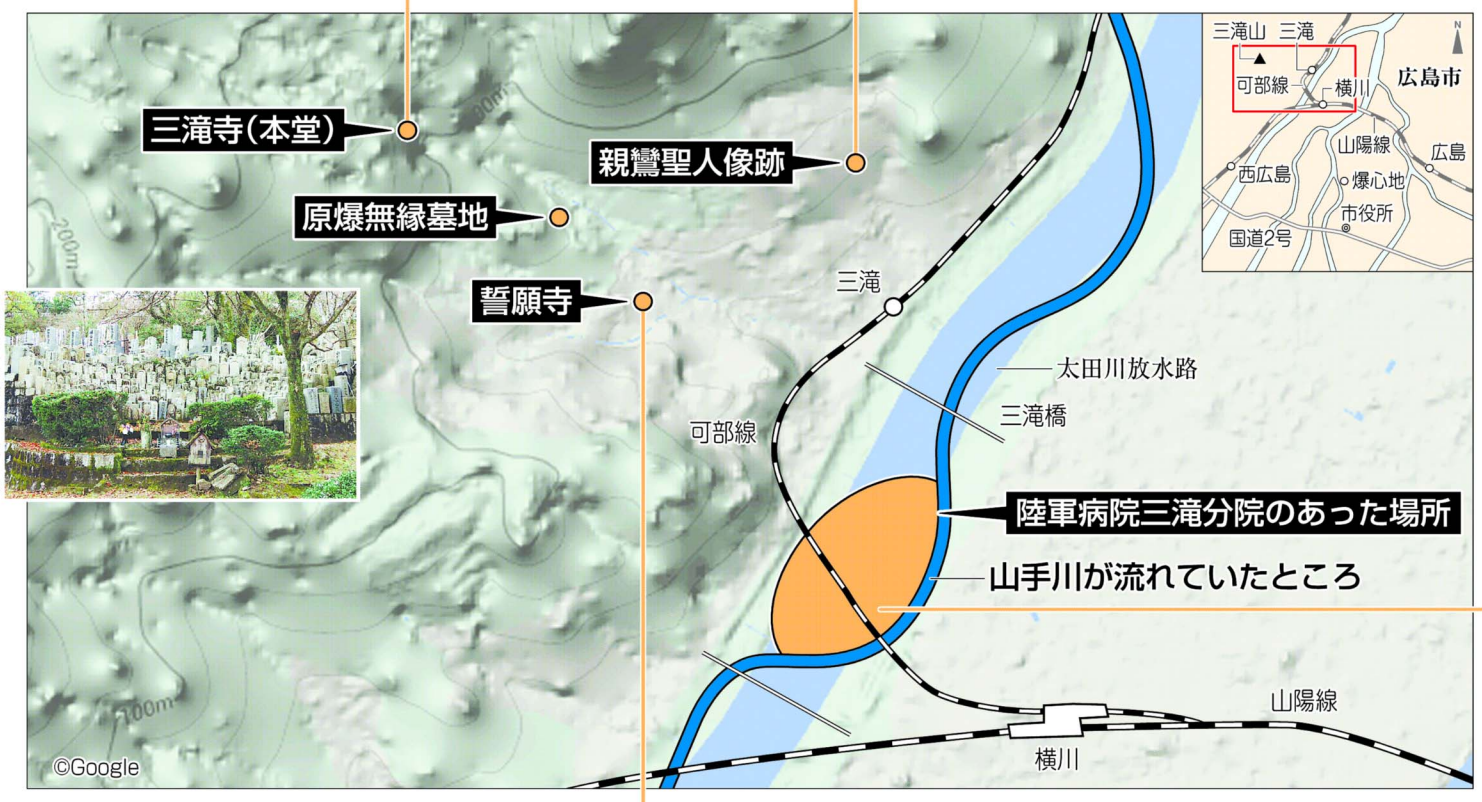
被爆してニューヨークに移された親鸞聖人像が置かれていた跡（撮影・溝上藍）

親鸞聖人像跡　焼けただれ今はNY

三滝山を少し上がると親鸞聖人像の跡があります。関西で鉄工業を営んでいた広瀬精一さんが、幼いわが子を亡くしたのを機に1937年に建てました。浄土真宗の信者が多い広島が設置場所に選ばれました。高さ約4メートルの大きな像です。

45年8月6日。広島市中心部の方を向いて立っていた像は、正面から原爆の熱を浴び、焼けただれました。

その後、ノーモアヒロシマを世界に訴えるために55年、ニューヨークの本願寺仏教会に移されました。今も現地の人に、平和の大切さを伝えています。（中1森本柚衣）



原爆で一家が亡くなるなどして行き場を失った墓が集まる原爆無縁墓地

陸軍病院三滝分院について説明する三滝歴史学習会の寺岡武さん＝右から2人目（撮影・溝上藍）

陸軍病院三滝分院　負傷者応急治療の場に

陸軍病院三滝分院は1937年に始まった日中戦争に合わせて山手川沿いに建てられました。原爆投下の際には、応急治療所が設けられた、といわれています。47年に取り壊されました。

分院があった場所は現在、太田川放水路になっています。洪水が度々起こっていた山手川と福島川を一つの広い川にすることが32年の国会で決まりました。2年後に工事が始まりましたが、戦争のため中断。35年の年月をかけ、67年に完成しました。（高3中原維新）

誓願寺　破壊され移転 墓地に無縁塔

誓願寺は、今は平和記念公園（広島市中区）になっている材木町にありましたが、原爆がきっかけで移ってきました。寺の墓地には、原爆で一家全滅するなどで行き場所のなくなった骨が納められた無縁塔があるほか、被爆した水盤石は今も使われています。

誓願寺は爆心地から約400メートルの所にあり、跡形もなく破壊されました。戦後、跡地に平和記念公園が造られることになったため、寺にあった2500前後の墓のうち、200～300を広島市の提案で三滝に移転したそうです。檀家たちの寄付によって、元あった場所の少し南（中区中島町）に仮本堂が建てられましたが、墓に近い方がいい、と1963年に今の場所に再建されました。

境内には川内村（現安佐南区川内）の人たちをまつる原爆供養塔もあります。45年8月6日朝、川内村から建物疎開作業で市内へ出ていた人々が誓願寺で休憩していた時に被爆して亡くなったため、51年に建てられました。寺が移転する際も一緒に移しました。（高2山本菜々穂）

原爆で角（右手前）が欠けた水盤石（撮影・川岸言織）

ふもとに住む土井さん　自宅ゆがみ近所で火災

三滝山のふもとに住む土井史郎さん(80)は150年以上前の江戸時代に建てられた自宅に生まれ育ち、今も暮らしています。原爆が落ちた時、家は爆風で瓦や障子などの建具が飛び、天井が落ち、家全体もゆがみました。蔵は、開いていた扉から爆風が入って壁が膨らんだそうです。

土井さんは当時、大芝国民学校4年生。山手川東側にあった三滝町の青年会館に通って授業を受けていました。8月6日、かくれんぼで鬼になって100を数えていた時、空にB29が見え、ピカッと光りました。気付いたら10メートルぐらい飛ばされ、頭にはガラスの破片が刺さっていました。

家に戻っても中がぐちゃぐちゃで入れません。地区には30軒足らずの民家がありましたが、土井さんは、少なくともかや・わらぶき屋根の7軒が燃えているのを見ました。

三滝には、広島市中心部からたくさんの人が水を求めて逃げてきました。土井さんの家の前を流れる山手川は水が少ししか流れていませんでしたが、遺体がいっぱい浮いていました。陸軍の兵士が棒で引っかけ上げて、河原で油をかけて燃やしていたそうです。（高1岩田央）

原爆にも耐えた自宅の前で、当時の様子を話す土井さん（右端）

次回は5月19日に掲載します。
ジュニアライターが取材後の感想をつづった「編集後記」を、中国新聞ヒロシマ平和メディアセンターのウェブサイト（http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=58498）で読むことができます。